

活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

第16号/平成19年7月27日発行 青森県立保健大学広報誌



平成18年度卒業式



平成19年度入学式



新入生合宿研修



オープンキャンパス

CONTENTS

学長挨拶	2	自治会・サークル活動紹介	15
学科長就任挨拶	3	就職関係報告	16
新入生歓迎挨拶	4	卒業証書学位記授与式 / 卒業記念パーティー	18
新入生のことば	6	卒業生からのメッセージ	19
上級生のことば	8	修士論文公開発表会 / ウェルカムパーティー	20
新入生合宿研修	10	青森県立保健大学学術研究集会	21
海外授業 (オーストラリア)	12	進学相談会・オープンキャンパス記録	22
国際交流関係	13	人事異動	23
特別講義	14		

[学長就任挨拶]

自主自立の大学創りにむけて



青森県立保健大学
学長

リボウィッツ志村よし子



学長に就任し、その重大な責任と、皆様とともに本学の発展のため前向きに取り組んでゆきたいという気持ちを新たにしております。

私自身の紹介ですが、終戦後1945年に生まれ、いつも時代の変革の節目を経験してきました。大学では聖路加看護大学の、第1期生でした。その後単身で当時1ドルが360円のころアメリカに留学しました。1970年代は公民運動の中のニューヨーク市で学び、アメリカの歴史とともに30年間たちました。私の人生は、日本とアメリカで丁度半々になります。学長という重大な責任ある職をいただき、日米を経験してきた自分へのチャレンジと捉えています。いかに両国を比較した上で、よりBETTERな大学教育を日本で実現できるかというチャレンジです。

私への課題は、グローバルな視点からいかに物まねでない、日本の特性を活かした特徴ある大学を構築し、運営してゆくかにあると認識しております。また一教授として直接に教育にあたり、学科長、国際科長をつとめさせていただきました。これらの経験をもとに、状況を正しくアセスメントし、賢く判断し、バランスのとれたフェアな決断を心がけたいと思っています。

組織の姿勢としては、この変革期において、地域の特性を大切にしながら変化を恐れない、自主自立で未来志向の開放的かつ創造性と柔軟性のある組織づくりに向かいたいと思います。基本的姿勢としては、不可能と諦めてしまう前に可能かもしれないという前向きな姿勢で、できることから行いたいと思っています。変革と進化には、時間がかかり教職員全員の参画が求められます。

次に本大学の役割は、専門職の人材育成という学生へのサービスであり、1. 社会に貢献できる良い学生を育てること 2. 質の高い教育を提供することだと思います。この2点は、高等教育の場におけるプライオリティと信じています。そして次第に学生参画の伝統を作り上げてゆきたいと思っています。風通しの良いコミュニケーション、柔軟性、皆様とのパートナーシップのもとに、より建設的で創造的な大学づくりを目指してゆきたいと思っています。

本学が一丸となり、大学競争のなかで、各々が本学のサバイバルとしての危機感を持ち、元気に変革に参画していただきたいのです。関係各位のご協力のもとに、本大学が、どのような波も乗り越え、しかも学生・教職員がエンパワーされた大学でありたいと願っております。

Together, We can make AUHW a better place and be open minded and not be afraid of innovation and change! Let's Do It!

[新入生歓迎のことば]

People who nature yourself can nature others

自らを育む者が、他人をも育む

青森県立保健大学
学長

リボウィッツ志村よし子

新入生のみなさまご入学おめでとうございます。多くの難関をパスされ、本学を選び、選ばれた学部の新入生及び編入学生、研究科の新入生の計207名の皆様を教職員一同、心より歓迎いたします。本日入学された学部生は、平成元年に誕生された新しい時代を担われる方々であり、変革の時代を担われる方々です。

さて、グローバル化する社会の中で、わが国も政治・経済・保健医療福祉・教育と大きな変革が求められております。この社会のニーズに応え、専門職として豊かな人間性と専門性を修得する大学学部教育、また博士前期課程では、高度実践力を備えた専門職業人を、博士後期課程では大学などにおける教育者や研究者の育成を目指しています。

本学に一貫する教育の理念は、ヒューマンケアを提供できる保健医療福祉の専門職の人材とさらに地域・

社会に貢献できる人材育成をめざしております。Human Care とは、Care の提供者である専門職としての知識や技術のみでなく、人間とはなにか理解を示し、病気や障害をもつ人々の心の痛みを感じる人に対して思いやりと、暖かさを持って接することができる人です。皆様には身体と心、そして人間を鍛えていただきたいと思ひます。また本学での人材育成とは、まさに皆様学生にとっては、自分を育むことだと思ひます。自分を育むエネルギー源として、一人暮らしで自分と向きあい、授業での新しい学び、アルバイト、部活動、ボランティア活動等を通し、喜びや悲しみやくやしきや感動を経験し感性を磨いてください。感動・感情のEMOTION(イモーション)のEは、ENERGY(エネルギー)のEでもあります。友人・仲間と感動を共有することでエネルギーは倍増します。生涯の友となりネットワークとなる良い仲間を作られてください。

次に望むことは、皆様自身で「健康とは何か」生きていることの実感を、是非体験していただきたいと思ひます。皆様は人の健康を守る職業に就かれるのです。私が若い頃、イスラエルのキブツの高校生の修学旅行に参加いたしました。それは、サイナイ砂漠を1週間、日中の炎天下を毎日4～6時間歩き続けるサバイバルの体験でした。この経験から得られたものは、健康への実感、また生きるとは、息をして、自然の中で汗をかき、水分・食物を補給し、友と苦痛を分かち合い笑うというシンプルな生命の発見でした。自分の五感を働かせ、ただただ歩き続け、日がおちるとキャンプファイヤーを囲み、降るような星の下で通り過ぎてゆくラクダの影をみながら眠りに就く生活でした。豊か過ぎるそしていのちを粗末にする現代にあって、生きていくために必要な基本的ニーズと「健康とは」を体で感じとり、与えられたいのちと健康に感謝し、自分にチャレンジしてください。

最後に、専門職には責任が伴います。そのためには、4年次の、国家試験に合格しないと学んだ知識や技術は使えません。それには、1年次から日々の学習をおこたらず準備していくことが肝要だと思ひます。一方、たとえ皆様の知識が増しても、まだまだ多くの支えが必要です。ミケランジェロの彫刻に青年期の王「ダビデの像」があります。りりしい知的な顔に憂いの表情を浮かべ上半身はたくましく成長した若者の体でありながら、支える下半身は細く頼りないことにおきづきでしょうか。

まわりをみわたしてください。皆様の周囲には、多くの人生経験を経た先輩や教職員がおります。また様々な機会に出会う患者さんや医療従事者との出会いからも数えきれない学びがあります。今から食欲に自分を育てていただきたいと思ひます。これから始まる大学生活は、二度とない時間です。この時間を大切に、そして大胆に使い、豊かな感性と専門職としての知識と技を育んでいってください。

[学科長就任挨拶]

学科長就任にあたって

看護学科長

藤井 博英



保健大学に就任し8年目を迎えるこの春に、看護学科長を拝命しました。大変、光栄で身の引き締まる思ひです。

最近よく皆様より「忙しいですか」と尋ねられます。忙しいの「忙」の字は、心を亡くすと書きます。本当に何かに追いまかれると、そのことをこなすことで精一杯になり、心を失ってしまいます。心がないから相手に思いやりの言葉もかけられない。「忙しい」そんなときこそしっかり看たり、聴いたりしなければならぬと自分自身、言い聞かせながら役割を果たそうと努力しているしだいです。

さて、近年の医学・医療の進歩はめざましく、医療技術は高度化するとともに専門分化しています。これに対応して、看護職にも、高度なチーム医療を進める専門的知識と技術、問題解決能力、

高い倫理性が要求されています。

様々な健康状態にある人々のニーズをしっかりと捉え的確に対応できる専門職の育成をするためには、教育・研究を充実させることが必要となります。このような時代に保健医療福祉に携わる人材を養成する大学の一員として、その役割と責任をしっかりと胸に刻み、優れた人材の輩出に努力していきたいと考えております。

また、卒業後、学生は、ジェネラリストとして、病院、保健所、訪問看護ステーション、行政、企業(産業看護師)などさまざまな領域で活躍しています。さらに、学問を深めたいと希望する時は、本学の大学院(健康科学研究科)に進学し、博士前期課程でスペシャリストや研究能力の開発をめざし、博士後期課程では看護学を探究し、研究者として研鑽を積むなど、看護師の生涯学習は多様な可能性に満ち溢れています。

学部学生の皆さんは、未来を切り拓くチャレンジャーでもあります。将来大学院で学び、専門職として成長し、時代の要請に応えた指導者・研究者を目指すことも期待し、全教員が全力投球で支援したいと思ひます。

良き友、良き師と交わり、 良き書を読もう



人間総合科学科目教授
嵯峨井 勝



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。希望に胸を膨らませて大学生活をスタートされたことと思います。入学して3ヵ月が過ぎ、大学生活にも慣れてきましたか？

本学は、その教育理念として、1) 人間性豊かな人材を育成すること、2) 保健医療福祉の発展に寄与できる人材を育成すること、3) 地域特性へ対応できる人材の育成、4) グローバル社会に適應できる人材の育成、を掲げています。

もう少し具体的にいいますと、病んだ人や年寄いた人、あるいは障害を持った人などをまごころを込めてケアする職業に従事する人材を育てることです。そのためには、保健医療福祉の知識・技術だけではなく、色々な職種の人と連携して、人のお世話をできる人間性豊かな職業人に成長していただくことです。

そのためには、知識・技術だけでなく、もっと広い世界の知識、見識を深め、また的確な情報を集めるとともに人とのコミュニケーション能力を高めることも必要になります。それら能力を涵養するために、人間総合科学科目では、人間を多方面から総合的に理解するための学問、現代人に求められる社会の変化や社会のニーズに適切に対応できる判断力や総合力を身に付ける学問、自らを見つめ、強く生きるための洞察力と幅のある人間性を養う教育に努めています。

しかし、これらのことは学んで身につくものではありません。あくまでも、皆さん自身が考え、悩み、友と語らう中で少しずつ身につけてゆくものだと思います。私たち教員は、それら学問の入り口に案内するのが精一杯と思います。どうぞ、皆さん、良き友、良き師との交流を深め、そして何より良き書をたくさん読み、実り多い学生生活を送っていただきたいと願っています。

皆さんの最良の教師は 今までも これからも



看護学科教授
山本 春江



看護を学ぼうとしている皆さんにとって、最良の教師は誰でしょうか。これまで、受験中のときも、合格したときも、苦しみも喜びも共にし、病気のときも健やかなときも、皆さんをいつくしみ育ててくれた、ご両親、ご家族こそが、今までもこれからも最良の教師です。

なぜならば、「看護」と名づけた、F. ナイチンゲールは、看護を「新しい芸術であり新しい科学である。これらの芸術は、どの家族にも、どの家庭にも関係し、その中でのみ教えることができるものである」といつているのです。つまり、人々が日常生活を営んでいる、その家庭の中にこそ、学ぶべき「看護」はあるといっているのです。

ナイチンゲールは、著書『看護覚え書』の冒頭で、「この覚え書は、看護婦が自分で看護を学べるようにしようとしたものでは決してないし、ましてや看護を教えるための手引書でもない。私は、健康について直接責任を負っている女性たちに、考え方のヒントを与えたいという、ただそれだけの目的で書いた」といつているのです。

看護学科にかぎらず、さまざまな人の健康と生活の質の向上をめざして学ぼうとしている皆さんにとって、これまで家族と共にすごしてきた日々の生活やご両親の、こまごました家族の世話や家事、仕事などすべてが、優れた、生きた教材となることでしょう。

また、ナイチンゲールは、前述の『看護覚え書』のあとに、「私は、女性たちにいかに看護するかを教えようとは思っていない。むしろ自ら学んでもらいたいと願っている」と続けています。ナイチンゲールは、もっとも大事なのはどうしたらいいのか、自ら学ぶこと、主体的に学ぶことであると語っています。

これから、4年かけて看護とは何か、自分に問いかけていってほしいと思います。そうした皆さんの問いかけに対しては、教員一同誠心誠意応えていきたいと思っています。

これからの四年間



理学療法学科講師
李 相潤



ご入学おめでとうございます。

皆さんはこれから四年間、個性豊かな教員及び仲間達と共に勉強だけではなく、遊びや社会活動などを通して大きく成長していくことと思われま。自分の個性を生かし、思う存分自分を磨いてほしいものです。

本稿では、皆さんに3つのことを提案したいと思います。第一、ヒューマニズムとは非常に聞き慣れた言葉ですが、今の時代では何よりも重要になっていると思います。時代の変化とともにモラルの在り方や考え方も変わりつつあります。しかし、人として守らなければならないことは「礼儀」であり、真の礼儀を身に付けることは、自然にヒューマニズムにつながると思います。それは皆さんが社会に出てからも必要な基本姿勢です。

第二、無限に広がる学問への追求です。知識を求めるのは人類の本性であり、学問を追及することは自分のスキルのアップでもあります。我々教員が学生に求めることは、「 $5 + 5 = ?$ 」という単純な答えではなく、「 $10 = ? + ?$ 」という考え方を求めます。今までの固定観念に囚われず、周りに影響されず、自ら考え、自ら行動すれば必ず得るものがあると思います。

第三、世界を見上げてください。皆さんがこれから活躍する場は世界であり、自ら考え、行動に移す勇気を身につけてほしいものです。本学ではそういう皆さんをサポートしていきます。チャンスがあれば、躊躇せず大いに活用してほしいものです。

上記で述べたことをどこまで実施するかは皆さんの努力次第です。これからの四年間、豊かなヒューマニズムを持ち、情熱的に学問への追求を深め、国際社会に対応できる力を備えてください。我々は皆さんが大きく羽ばたき、頑張れるように精一杯サポートしていきたいと思います。それでは皆さん、一緒に頑張りましょう。

社会福祉の歩き方



社会福祉学科准教授
増山 道康



ギリシャ神話のオイデップス譚の一節にスフィンクスの謎が出てきます。「最初は4本足、次に2本足、最後は3本足、何だ」。答えは人間です。はいはいしている幼児が、成人し、やがて老いて杖にすがる。人の一生は、山あり谷あり、徳川家康は「重荷を負いて坂道を上るがごとし」と言っています。

困った時に、苦しいときに、相談できる人がいるとどんなにかうれいでしょう。社会福祉の仕事は、生まれてから亡くなるまで、人が生きていく中での困難と一緒に考え、その人なりの解決を見つけることをサポートすることです。困りごとを抱えた人への支援とは、やってあげることはありません。その人が自分で抱えている問題を解決できるように相談、助言することが本来の支援です。それをソーシャルワークと言います。

社会福祉士や精神保健福祉士の資格はソーシャルワークを職とするための基本的な資格です。資格を得るには、国家試験に合格しなければなりません。資格を得ただけではソーシャルワークはできません。社会福祉の各分野、領域や利用できる社会資源等について広くかつ深い十分な知識が必要です。また、相談、助言をするためには援助技術を会得しなければなりません。さらに、高い倫理、道徳を身につけ、知識や技術を多方面に応用できるよう修業することも必要です。

大学で知識を学び、技術を習得したら実際に試してみてもさらに磨きをかける必要があります。頭で覚えても実践しなければ、何も生み出せません。そのために、現場実習が必要になります。

授業、演習、援助技術演習、現場実習によって学び習ったことを社会に出て実践していくことが大事です。大学の4年間を社会福祉を探求しながら、福祉の森を歩いてください。きっと何かが見つかります。

保健大学に入学して

看護学科1年
老久保 美奈

私が保健大学に入学してから、早くも2ヶ月が経ちました。入学当初は新生活に期待を感じながらも、不安で胸がいっぱいでした。しかし、私の感じていた不安は学校行事をきっかけに徐々に解消され、今では毎日充実した生活を送っています。

大学で行われている授業は、私を学習面だけでなく心理面をも成長できるよう導いてくれています。私は意見を発言することが苦手で積極性に欠けます。しかし、授業を受けてきて積極性の重要性を学びました。それ以降授業参加への意識は変わり、今ではできるだけ自分から発言するように努めています。また、私とは異なる意見を持った人と話す機会も大学では多くあります。自分とは異なる意見を聞き、考えることで多面的な考え方ができるようになってきたと感じています。そして、臨床現場での貴重なお話を先生方から伺うこともできます。このような恵まれた環境で学ぶことができ、とても幸せです。

今後、授業はさらに専門的且つ難易度が増していきます。時には辛くなることもあると思います。そんな時は原点に戻り、初心を思い出して生活していきたいと考えています。日々努力し、思い描いている看護師になれるよう仲間と支えあいながら4年間頑張っていきます。

干布かったのですが今は平気です。料理については最初の頃はおかず、サラダ、味噌汁と健康的な食生活でした。しかし今は主におかずしか作らず、一人暮らしをすると母親の偉大さを実感しました。

勉強についてはどの授業も関心の持てる内容ですごく楽しいです。そしてどれも将来の自分のためになる勉強ばかりで勉強を頑張らなければならないと実感します。大学の講義は高校の授業とは違いレポートを提出したり、自分が主体的に取り組む講義が多いと思いました。このような講義は将来職場に就いた際自分の意見を積極的に述べる力ができる力を付けてくれると思います。

これからは勉強はもちろん、様々なことに充実した生活をしていきたいです。

ゆっくり。迷いながら。

社会福祉学科1年
宮本 昌奈

太陽が少しずつその光を強め、温かな風が心地よく吹き抜けていく。期待と不安で胸をいっぱいにしてきた入学式から、早いもので、もう2か月。あの時はまだ固く閉じられていた桜の蕾も、今は青々とした若葉に姿を変えている。もうすぐ、私にとって生まれて初めての「青森の夏」がやってくる。

入学して、最初の頃は毎日不安と期待がめまぐるしく入れ替わり、「楽しい」と思う間など、正直無かった。ここに来たことを何度後悔したかしかない。しかし今、ようやく生活に落ち着きを持てるようになったのは、サークルなどを通し、違う学科の友達ができたり、先輩方との交流の機会が増えたりし、この地で送る日々の良さを実感できるようになったからなのだろう。勉強も高校までの受け身的なものとは異なり、自ら学ぼうとしなければ講義もまるで意味を成さない。しかしそれも自分の目標を見失わないための良い刺激として受け止められるようになり、自分の学習に対する姿勢を確立することができた。

大学生活はまだ始まったばかり。これから先にはさらなる不安も待っているだろう。だがそれに負けることなく、自分自身と向き合いながら、ゆっくり、確実に歩んでいきたいと思う。

青森の地で…

理学療法学科1年
松本 大輝

この青森県立保健大学に来て早いことで2ヶ月が経ってしまいました。大学生活は授業以外にも楽しいことで満ち溢れています。授業の合間に友達と語らう風景は青春としか言いようがないです。時にはサークルで汗を流し、時にはアルバイトで汗を流し、時には勉強で汗を流し、まだ春なのに汗にまみれた毎日です。夏が楽しみです。

自分はこの春から一人暮らしを始めました。最初の3日間ぐらいは台所の暗い部分などが若

新しい出発

編入学生：
看護学科3年
沼倉 知世

この4月、私は不安と期待を胸に、生まれて初めて北海道外での生活をスタートさせました。短期大学在学中に多くの患者様やそのご家族と出会い、看護の楽しさや喜びを知りました。しかしそれと同時に、看護の難しさや奥深さ、自分の知識や技術の未熟さにも気づかされ、専門職としてもっと幅広い知識と技術を身につけたいという気持ちが強くなり、ここ青森県立保健大学への編入学を決意しました。

初めのうちは、慣れない土地での生活や新しい環境の中で戸惑いや不安も感じましたが、同じ編入の仲間や先輩・先生方などたくさんの人の温かさに助けられ、今では楽しく充実した毎日を送っています。また、3年生の授業だけでなく1・2年生や他学科の学生と一緒に講義を受ける機会があることも編入生の特権だと思っています。たくさんの人達との出会いは、私に日々新たな発見と学びを与えてくれます。この2年間は自分にとって新たな挑戦の機会であり、将来、人と関わる職業につくために必要な感性や心を養う時期であると考えています。

学ぶということにとっても恵まれたこの環境の中で、専門職としてはもちろん、一人の人間として成長し卒業できるよう初心を忘れず努力していきたいと思っています。

挑戦を
楽しみましょう!!大学院：
博士前期課程1年
張 恩美

私は5年前、韓国の仁済大学と青森県立保健大学との交流生として青森に来ました。高校生の時までは班長をやりながら活発な学校生活をしましたが、大学での専攻は担任の先生に薦められて決まったせいもあり勉強もキャンパス生活にも興味がありませんでした。そんな生活を続けましたが、3年生の時日本の学校と研修が始まることを聞いて積極的に日本に行きたいという声を出しま

した。一ヶ月間の研修は本当に楽しくていつかまた日本に来て勉強したいと思うようになりました。外国での生活は私にとって初めての経験ばかりで言葉の問題は勿論いろんな手続きをしたり、毎日自転車に乗ることが慣れなくて大変でした。一人暮らしは寂しい時もありますが、自分についてゆっくり考えることができるきっかけになりました。人生の大事なことも他人によって決めてしまった私でしたが、日本に来てからは自分がやりたいこと、将来なりたいことなどを一所懸命に考えています。大学院生として行う動物実験も初めてですが、初めて経験することだからこそ楽しめば、難しいことも切り抜けられると思います。これからも日本で充実した学生生活を過ごし、自分の夢に向かって頑張りたいです。

行けるとこまで
行こうよ大学院：
博士後期課程1年
村上 成明

この4月から、再び大学院で学ぶことになりました。“再び”なのは修士課程1期生だったからです。偶然なのか計らいなのか、以前と同じ研究室の同じ席を頂きました。2年振りに見る景色は、苦勞した記憶をも呼び戻しますが、今はすべての思い出が心地よく感じられます。ただ、懐かしさに浸ってられるのもきっと今のうちだけでしょう。

私にとって博士後期課程への進学はとても大きな挑戦ですが、「行けるなら、行けるとこまで行ってみたい」という性分のおかげで今ここにいます。何事も始まりには不安と緊張がつきものですが、一方でワクワクとした愉快的気分も感じてしまうのは、恐怖心に勝る好奇心の賜物でしょう。今さら覚悟がどうであれ試練はやってきますので、逆境を楽しみながら乗り越えていきたいものです。

こんな楽観的な人間ですが、再び看護マネジメント領域で『知識』をテーマに研究したいと考えています。実のところ修士課程修了後はほとんど進んでいませんので、メインテーマ復活なるか？というところです。先生方や院生の皆様との交流を大切にしつつ、「行けるとこまで行ってみよう」の精神で、四十路の学生生活を歩んで参りたいと思います。

新入生の皆さんへ



看護学科4年
浅田 恭子

新入生の皆さん、大学生活にはもう慣れたでしょう？私は4年になりましたが、この4年間あっという間でした。授業、実習、試験、サークル、バイトとすべてを一生懸命にやってきた私ですが、どの時間も充実していました。試験や実習などでは、大変な思いもしましたが、それらを乗り越え、自分の様々な可能性を見出す事ができ大学に入学して本当によかったと思っています。

私が新入生の皆さんに伝えたい事は、何事にも挑戦して欲しいということです。苦手な物から逃げていると本当の自分を見つける事はできないと思うからです。新しい環境に出て、新しい物に触れていく中で、楽しいこともあれば想像以上につらいことも必ずあります。でもそれを乗り越えた時に、“自分はこんな事もできるんだ”“自分にできる事がまだあるのではないか”という発見ができると思うのです。

看護は専門職であり、途中この道で良いのか迷う事があると思います。でもそこですぐに諦めるのではなく、もう一度良く考えてみてください。看護はとても複雑で難しい事も多いのですが、看護の楽しさを見つけることが出来れば充実した4年間を過ごせると思います。

楽しみを見つけてください



理学療法学科3年
鳥山 里香

大学という新たな環境にも慣れ、自分なりの生活リズムができてきたことと思います。

大学では、勉強面や他の場面においても、与えられるばかりではなく、個人で選択し実行する場面が多々あります。たくさんのチャンスの中から自分に適したものを見つけ、時には不安もあるかもしれませんが、新しいことにもどんどんチャレンジしてください。そして、困った時は周囲の友人や、先輩、先生方を頼ってみてください。新たな発見があるかもしれません。周囲から知識や常

識を吸収することにより、社会人としても成長できると思います。

大事なことは一人で抱え込まないということです。人と接することを恐れなさい。コミュニケーションをとるということは対人関係を形成するために必要不可欠であり、医療従事者として重要な要素です。そのキーポイントは「笑顔」です。これは看護師だった祖母から入学時に教えられた言葉です。笑顔であるには自分自身に余裕がなければなりません。そして笑顔は相手に好印象を与えます。

時間は平等に与えられ、限られています。生活に余裕を持ち笑顔を絶やさぬよう、上手に時間を使って充実した大学生活を送ってください。

新入生の皆さんへ



社会福祉学科4年
竹中 牧子

新入生の皆さん、大学生活には慣れましたか？大学での生活はこれまでの生活とは一変して、戸惑うことも多いのではないかと思います。私自身も3年前に入学した頃は、これから始まる新生活に希望と不安でドキドキで、ガラにもなくホームシックになってみたりしたものです。

これまでの生活と大学生活とで大きく異なる点は、自由が増える点です。大学生活を始めると同時に一人暮らしを始めた人も多いと思います。一人暮らしを始めると、時間や金銭など様々なものが自分の裁量に委ねられます。授業後の時間をバイトに費やすのも自由ですし、友達と過ごすのも自由です。生活にとどまらず、どの授業を選択するかなど多くの自由が私たちには与えられます。しかし、注意しなければならないのは、自由であるという反面、責任が伴うということです。自分の行動の結果は全て自分に返ってくるのです。失敗も成功も全て自己責任です。だから、一生懸命考えて、自分なりに決断・行動しなければなりません。

ですが、もし失敗してしまったら、そんな時は、私たち先輩や大学の先生達に相談してみてください。きっと何かしら手助けできると思います。それでは、皆さんが楽しい大学生活をおくることを祈っています。

新入生の皆さんへ

編入学生：
社会福祉学科3年
三原 章子



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。入学から数ヶ月が経ち、大学生活にも慣れた反面、まだ不安なことも多々あるかと思います。

大学生活をより充実したものにするために、私から皆さんに伝えたいことが二つあります。一つは、大学の四年間というものは、長いようでいてあっという間だということです。その限られた時間を目的を持って有効に使うか、何となくボーっと過ごすかは自分次第です。勉強ももちろんですが、アルバイトやサークル活動、友達と遊ぶなど、学生だからこそできることを思いっきり楽しんで欲しいと思います。

もう一つは、お互いを高めあえるような仲間を見つけて欲しいということです。これからの四年間、将来のことについて考えたり、たくさんの乗り越えなければならない壁にぶつかったり、自分と向き合うことが多くあるかと思います。そのような時、そばに信頼できる仲間がいてくれることは本当に心強いものです。友人とは、良き理解者であり、ライバルでもあります。お互いにいい意味で刺激し合い、助け合いながら、一緒に成長していきましょう。

私もこのことを忘れず、残りの大学生活を有意義なものにしたいと思っています。新入生の皆さんも保健大での四年間が名実ともに充実したものになるよう、日々の生活を大事に過ごしてください。

人との繋がり

大学院：
博士前期課程2年
畠山 愛子



新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

私は精神保健学分野で学んでいます。大学院では先生方、同期の方々はもちろん、精神保健学分野を卒業した諸先輩との繋がりが、授業以外でも学ばせていただいている事が数多くあります。

大学院では各々がもつ課題に取り組み、最終的に論文にまとめるわけですが、研究を進める時には、多くの人から意見をもらうことが、よりよい研究結果を生むことに繋がると思います。また、ここ

で得た人脈は今後の自分の財産になると思います。そのため、新入生の皆様にも、大学院の2年間で、より多くの人との繋がりを作ることをお勧めします。

私は通学に車で往復4時間かかります。そこで、その4時間に詩や文学のCDを聞いて楽しんでいます。新入生の皆様の中にも私のように通学時間の長い方がいるかと思います。長い通学時間を楽しいものにする方法を考えてみるのはいかがでしょうか。

青森県立保健大学は先生方、学習環境共にとても恵まれています。食欲に学び自分の目標に向かって頑張ってください。

「孤独」の価値

大学院：
博士後期課程2年
山道 弘子



新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。私は現在、青森市内の短期大学で教員をしています。働きながら学ぶことは時間的な制約など限界もありますが、一方では、教育をする側の立場と学ぶ者の立場を同時に体験できる貴重な時間ともいえます。同期の仲間も幅広い年代にわたり、学問的にも精神的にも多くのサポートをいただき、大変恵まれた環境で学ぶことが出来ています。博士後期課程の1年目は、学位論文作成の基盤となる概念分析や研究方法論の学習、指導教授の先生方からの熱心で心温まるご指導、悶々と思いを巡らし考える日々で瞬間に過ぎてしまいましたが、1年間を振り返り、私は「孤独」の有用性に改めて気付かされました。イギリスの精神医学者、アンソニー・ストーは著書「SOLITUDE (The School of Genius)」のなかで、「孤独は、創造力を活発にする機会を与える」と言及し、「学習や思考や革新や自分の内的世界との接触を維持することは全て孤独によって促進される」と述べています。人間は社会的存在であり多くのものや人との交流もまた重要であることは言うまでもありませんが、同時に、学問の創造を目指す初学者として、独りでいられる能力を身につけ、孤独に価値を見だし、自らの想像力を高めていく努力が求められていることも確かです。私は残りの博士後期課程を、「孤独」の時のなかで研究と真摯に向き合い、それらを通じて自らを省察し、人間としても成長できる創造的過程にしていきたいと思っています。新入生の皆様が本学で実りある学生生活を送られますことを心よりお祈りしています。

新入生合宿研修を終えて

新入生合宿研修教員側実行委員長 社会福祉学科 准教授 安田 勉

今年度も、4月13・14日の両日にわたって、岩木山青少年スポーツセンターで新入生合宿研修が開催されました。昨年度の日程より1日減ったことにより、プログラムを再検討しました。幸い実行委員の協力により充実したプログラムを作成することができました。

13日は、学内で学科別のオリエンテーションとイングリッシュプレゼンテーションが行われ、その後、バスで岩木山に向かいました。約1時間30分かかる移動バスの中で、禁煙セミナー、悪徳商法対策の説明、津軽弁クイズなどのレクリエーションが行われました。到着後は、オリエンテーションの後、看護学科上級生による「デートDV予防」の寸劇を交えた紹介がありました。ユーモアの中にも説得力ある説明で好評でした。夕食

後は、各学科に別れて交流会が行われました。多くの上級生の参加もあり、各学科とも終了時間を忘れるくらい笑い声の絶えない有意義な交流会になったようです。14日は、「名前ビンゴ」を中心としたレクリエーション大会が開催されました。自分の名前の一文字（漢字）をビンゴマスの中に入れビンゴカードを作り、その後、読み手が漢字を読み、ビンゴカードをチェックするというものです。上級生のリードのもと和気藹々と進行し、楽しんだようです。最後に、ブレイクダンスを鑑賞し、帰路に着きました。

新入生の相互交流、上級生・教職員との交流という当初の目的は達成できたのではないかと思います。この交流をもとに充実した学生生活を送れることを願っています。

最後になりましたが、新入生合宿研修にご協力頂きました教職員の皆さん、そして何よりも中心となって合宿研修を運営して頂きました学生実行委員の皆さんに感謝申し上げます。

新入生合宿研修を終えて

新入生合宿研修委員長 社会福祉学科3年 尾崎 舞

今年も昨年に引き続き学生が主体的に企画・運営を行う新入生合宿研修となりました。初めて学生主体で行われた昨年の反省点や、今まで新入生として合宿に参加した上での反省点・工夫も考慮しつつ準備を進めていきました。入学して間もない新入生にとって、まだ右も左もわからぬままの合宿研修だったかと思いますが、その中でも新しい友人との出会いや上級生・教員との関わり等、多くの人々との交流を通して今後の大学生活が有意義なものになる手助けにと準備を進めていきました。準備にさしあたり、多くの教職員・上級生の協力もあり、学生主体として合宿研修を迎えることが出来ました。

<合宿研修1日目 / 4月13日(金)>

合宿研修1日目は行きのバスの中でのレクリエーションや夕食前のオリエンテーション、上級生との交流が中心となりました。バスの中では、上級生が中心となって自己紹介及び津軽弁クイズが行われました。各号車とも盛り上がっていたようで、合宿研修の始まりとしてはよかったのではないかと思います。

現地に到着後、オリエンテーションが行われま

した。ここでは、看護学科の学生によるデートDVの紹介及びサークル紹介の冊子の配布・紹介が行われました。



学長あいさつ



新入生と上級生の交流

夜には上級生との交流ということで、看護学科・理学療法学科・社会福祉学科に分かれたプログラムを組み、学科毎で上級生と新入生の交流の機会を設けました。学科によって内容に差はあるものの、学校生活にたいする不安や疑問を解決するよい機会になったのではないかと思います。

プログラム以外の部分でも食事・夜・お風呂等、新しい友人と過ごし語り合う機会を楽しんだ新入生も多く、大学生活の始めの思い出を刻めたのではないのでしょうか。



食事をしながらの語り



部屋に帰ってからの交流

<2日目 / 4月14日(土)>

2日目は体育館を使用しての全体でのレクリエーションが行われました。このレクリエーションでは、新入生は学科関係なくチームが生まれ、学科の壁を越えて協力しながらレクリエーションを楽しむことが出来ました。今年は車椅子の学生もいるということで、例年とは違った形の体育館交流となりました。



名前ビンゴで自己紹介

始めに、自己紹介を兼ねた名前ビンゴが行われました。各チームとも自分達で当てはめた漢字が呼ばれるように祈りながら、当てはまったときには自然と声が上がっており、楽しんでいるように見えました。

次に、ジェスチャーゲームが行われました。チーム毎に数名を選出し、全員の前でゲームに挑戦するというものです。ジェスチャーゲームの内容は非常に難しく、悪戦苦闘しながらも楽しめていたのではないかと思います。

ゲームの内容上、盛り上がり欠ける部分もありましたが、新入生、上級生ともに楽しめたレクリエーションでした。

最後に、テクニカルサークルによるダンス発表で合宿研修の締めを飾りました。

<全体を通して>

「大学生活に慣れてほしい」「楽しい合宿研修になるように」「有意義な思い出に」と実行委員会として準備してきた、完璧とはいかない部分も多々ありましたが、新入生にとって何らかの形の思い出として残るものとなったのではないかと思います。新入生同士が楽しく語り、笑い合い、仲良くなっている姿を見ると、自分たちの入学時の様子が思い出されるとともに、このような機会に関わることができて本当に良かったと思います。反省すべき点も多々ありますが、今後に向けてこの経験を引き継げればと考えています。来年以降、この合宿研修という形が継続されるかはわかりませんが、上級生として不安と期待を込め入学してくる新入生に何かを残してあげられたら良いのではないかと願うばかりです。

オーストラリア初体験記

～ ENGLISH COMMUNICATION で学んだこと～

看護学科3年 笹森 雪乃



オーストラリアでの3週間は、驚き・発見の連続でした。毎日が新鮮で、日本とはまったく違う風土や文化を学ぶことができ、日本ではできない経験がたくさんできました。

シドニーの大学には、3週間だけの留学でしたが、中国や韓国、タイ、ヨルダンなど多くの国からの留学生が来ており、大学で勉強した英語でコミュニケーションをとることができました。またたくさんの国の人と接することで「やっぱり日本とは少し違う。」「こんな世界もあるのだな」と感じ、自分の“価値観”も毎日変わっていきました。

校外見学では、シドニーの市街を見てオーストラリアの歴史を学ぶことができたし、買い物もたくさんできました。また週末のツアーでは、オーストラリアの観光名所を回ったりしました。

さらにシドニーの看護の大学にも見学に行き、日本とは異なり、さまざまな面で医療が進んでいるなあと感じました。日本では病気の治療など、患者の身体的なケアは充実していますが、患者の精神的・社会的な面でのケアはまだまだ遅れています。しかし、オーストラリアでは日本とは比べものにならないほど、精神的・社会的なケアが充実しています。他の国の医療を知り、日本の医療の改善点を考えることができるいい機会だったと思います。

ホームステイは、最初の3日間は英語があまり聞きとれませんでした。慣れると自然に聞き取ることができ、返答もできるようになりました。ホストファミリーはとても優しく接してくれて、滞在中、様々な面で助けてもらい、支えてくれました。人との出会いは本当に大切なものだと感じました。

オーストラリアでの3週間で英語力は向上したと思いますし、たくさんの人と出会い、今までにない経験をすることができました。この体験記を読んで、少しでも興味を持ってくださった方は、ぜひ参加してみてください。

海外研修 2007春、海外に憧れて

社会福祉学科3年 木村 圭佑



現地到着早々、ワーホリで渡豪していたスタバ店員の日本人の方に、自分の持てる英語力を駆使してオーダーした自分に少し頬を赤らめました。道に迷う、米がマズかったためポテトとサラダ中心の食事、タイ人のクラスメートに「あなたが一番素敵」と囁かれる、僕ら日本人を魅了したイケメン、ティム先生は同性愛者で、かつ私を時折甘い目で見つめていた等…いい思い出です。

ここで少し真面目なお話です。「担任が同性愛者」とサラッと上述しましたが、「同性愛者」にどのようなイメージを持ちますか。シドニーとサンフランシスコでは年に1度、同性愛者の祭りが開催されていて、私たちはその祭りに参加できました。そこには、同性愛者を非難する人などひとりもおらず、手を繋いだりキスをしたりしている同性愛者のパレードに、シドニーの町が大きな拍手と歓声に包まれていました。自分の意見・思想・宗教等、それを権利として主張し、自由に生活するということが一般化していることが一番の驚きであり、この海外研修の最大の収穫であったと思います。しかし、主張が激しいあまりにアメリカと同様訴訟大国になりつつあるというオチがあります。姿や肌の色、宗教などで差別することなく、人の本質を捉え、相互にそれを認め合うということは、当然のようでありながら日本で実現されているとは言えない現状にあります。「人権擁護」「自己決定の尊重」という議論は日本人が作り出した差別文化が起因となっているに過ぎないのです。この祭りは「Mardi gras」というお祭りです。興味がある人はyoutubeで検索してください。

つまり、多角的視野を持つことは重要だということです。そのためには机に座って受身的な講義を受けていることより、主体的かつ積極的に人とかわることが必要です。国境を越えて多くの人と交流できる、その機会として存在するこの海外研修に参加することを行ってきた本人が薦めています。Happy Mardi gras！！

★第3回米国ベレノバ大学看護学生との交流

国際科長 深谷 智恵子

米国ベレノバ大学看護研修生10名（学生8名、教員2名）が平成19年5月13日（日）から19日（土）まで本学で研修を行った。研修は、リボウィッツ志村よし子学長の表敬訪問に始まり、本学内の研修だけにとどまらず、近隣の医療保健福祉施設を含めた幅広い分野に渡って行われた。

本学においては、「日本のヘルスケアシステム」上泉和子教授（副学長）、「コンプリメンタリーセラピー」木村恵美子講師の講義が行われ、ベレノバ大学からは“Role of the Emergency Department Nurse” Elizabeth Blunt 教授の講義が行われた。Blunt 教授の講義予定日には浜館地域に落雷があり大学が長時間におよぶ停電となったため日程を変更して行われるというハプニングがあった。それにもかかわらず、救急看護認定看護師や救急隊員などの参加者もあり無事終了した。

学生間の交流も活発に行われ、ウエルカムパーティでは、学生による本学および青森県の紹介が英語で行われ、ベレノバ大学の学生からは看護実習の体験、がん看護に関する学びが報告された。

近隣医療保健福祉施設の見学研修では、青森産業保健推進センター、青森県立中央病院救命救急センター、地域看護実習の浅虫研修、弘前脳卒中センター、ハローベビー助産院などを訪問した。一週間の間、時差ぼけにも慣れない環境にもめげず、体調を崩す人もなく、全員元気で研修を終えた。また研修以外の時間もフルに活用され、特に本学のボランティア学生たちの案内で、近隣の店での買い物、飲食、そして温泉と、青森ライフを堪能していたようである。19日早朝、「とても素晴らしい研修であった」と感謝の言葉を残し、十和田湖で1泊、その後京都に回る予定で本学を出発した。



学生同士で談笑



リボウィッツ志村学長からプラント教授へ感謝状



歓迎ポスター



看護学科学生によるプレゼンテーション



元気ブラザー



小児看護学内実習

漢方医学の基礎知識

人間総合科学科目主任教授 藤田 修三

平成18年度特別講義の一環として、去る平成18年12月22日（金）に（株）ツムラ医薬学術課早川晃正（はやかわてるまさ）氏をお招きし、「漢方医学の基礎知識」を講義いただいた。最近、医学教育コアカリキュラムに医師が和漢薬を解説できる知識を教育するという医学部もあり、保健・医療・福祉に携わる高度職業人を育成する本学においても漢方医学の概要を知るべく企画された。

講義は、「漢方とは」から始まり、それは中国医学（中医学）と同じではなく、漢の医学と西洋医学（当時の蘭学）から日本人にあうように考案されたものであること、また「漢方薬とは」草根木皮、動物、鉱物など天然物を「炙る、皮を去る、節を去る」など処理して調製される数種類の生薬を組合せ、相乗・相殺効果をうまく利用したものなど、漢方の定義から始まった。民間薬のように単一成分ではなく、数種類の生薬から調製するというのがみそである。

後漢の時代の「神農本草経」に365種の生薬が収載されており、それを基本生薬として、漢方の治療方法（八法）に基づき処方することを知った。さらに、漢方治療の考え方、生薬の四気（寒、涼、熱、温）とその作用をもつ生薬の紹介、漢方医学

で薬剤が選択されるまでの四診（望診、聞診、問診、切診）のプロセス、「証」や「気」といった考え方、生薬のブレンド法、西洋医学と漢方医学の相違点などが示され、講義を聴き終え、疑問点や整理されない部分も少なからずあるが、学生にとって「漢方・漢方薬」に対する見方が深まったように見受けられた。

西洋医学は、ひとつの症状や病気に対する直接的な治療を主とし、治療薬は比較的明瞭な単一化合物をよく用いるのに対し、東洋医学は、慢性的な病気や全身的な病気の治療を主とし、漢方薬は使用機序の解析が困難な少量多数の成分の混合物を用いると対峙するような学問に思える。西洋医学はエビデンスを確立させたなるほど合理的な学問であるが、生活のさまざまな習慣が原因の糖尿病、高血圧など生活習慣病対策には、複雑系には複雑系で対処する東洋医学の考え方にも共感を覚える。そういえば壮年期を過ぎると生活習慣病が蔓延し、漢方、漢方薬の言葉をよく耳にするようになるのは自然なことと思える。

最後に今回の講義は、司会運営に佐藤秀紀学部長のひとかたならぬ支援のあったことを、お礼申し上げます。



学生自治会紹介

自治会長（社会福祉学科3年） 尾崎 舞

学生自治会役員選挙によって選出された自治会役員9名及び4月に入り選出された各種委員長3名によって学生自治会及び本部会は組織されています。ここで本部会役員を紹介したいと思います。まず自治会副会長は坂下浩子さん（社会福祉学科3年）、小山内鮎美さん（看護学科2年）、書記は目澤亜紗美さん（社会福祉学科3年）、鈴木茉莉香さん（社会福祉学科2年）、会計は大野和佳子さん（理学療法学科3年）、松本星子さん（理学療法学科2年）、庶務は松山明日香さん（看護学科3年）、品川聖羅さん（社会福祉学科2年）（以上自治会役員）、選挙管理委員長は熊澤芽葉恵さん（看護学科1年）、サークル代表委員長は田中ますみさん（社会福祉学科3年）、大学祭実行委員長は北沢泰君（理学療法学科3年）です。私を含めた自治会役員・各種委員長、計12名及び安田勉先生を中心に自治会活動を進めていく予定です。

私たち自治会では、看護学科・理学療法学科・社会福祉学科それぞれの学生が、自分たちが学ぶ分野の枠を越えて交流が図れるように、また学生の皆さんの大学生活が充実したものになるように活動していきたいと考えています。昨年度から始まった学生総会やHPの更新等の活動の定着及び更なる活性化を図るとともに、サークル活動や学校行事等の学生生活を支援し活発化できればと考えています。

しかし、何に対しても活発な大学、学生が充実した生活を送ることができる大学は、教職員の方々が創り出すものではないし、私たち自治会役員だけではどうすることもできません。学生の皆さんと一緒にこの大学を盛り上げ、そのような大学にしていくために、学生全体の意見を反映しながらよりよい活動になるよう頑張っていきたいと考えていますので、どうぞ宜しくお願い致します。



サークル(STEREOCOMPANY)活動紹介

看護学科2年 伊藤 円香



ステレオカンパニーは、1年生から4年生まで音楽が好きな学生が自由に集まって自由に活動する軽音楽サークルです。授業の空き時間や放課後にサークル室に集まって練習しています。年間行事として新入生歓迎ライブや大学祭での後夜祭ライブ、クリスマスライブなどがあり、毎回沢山のギャラリーと一緒に大いに盛り上がっています。私たちもライブを盛り上げるために、ライブが近くなると、指のタコがはげると、声が嘎れるまで、腕が筋肉痛で動かせなくなるまで練習しています。練習時間やサークル室の使用時間は決まっておらず、普段サークルメンバー全員が集まるということはほとんどありません。みな自由に集まって好きな時間に好きなように練習しています。サークル室にある楽器や機材は、サークル費や歴代の先輩方から寄付されたもので、みんなで大切に扱っています。

サークルメンバーは、プロとしてやっていけるくらいレベルの高い経験者から、楽器に触れるのも楽譜を見るのも初めてという全くの初心者までさまざまです。そんな初心者でもやさしい先輩が一から手取り足取り教えてくれます。サークルの活動以外でも、お花見をしたりバーベキューをしたりと、先輩後輩で仲良くなれる機会が沢山あります。バンドのメンバー構成も、同じ学年で組んだり先輩後輩で組んだりさまざまですが、基本的に上下関係はオープンで、サークルメンバーはみんな仲がいです。みんな音楽で繋がっています。音楽の力は偉大です。音楽を楽しむ上で年の差は関係なく、それぞれの音楽に対する情熱のもと、みんなでキャンパスライフを楽しんでいます。こんなステレオカンパニーを温かく見守ってください。よろしくお願いします。

第5期生の就職・進学活動を振り返って

就職対策委員会

本学第5期生の就職状況は、これまでと同様に非常に高い内定・就職率を達成・維持することができました。学生への就職活動サポートは本委員会を中心に全学体制で取り組み、主に次のような支援事業を行いました。

- 1 県内外の病院・社会福祉施設等に対する就職用パンフレットの配布及び求人票の提出依頼
- 2 学生と事業所人事担当者との直接面談による就職合同説明会の開催
- 3 模擬面接や小論文添削指導の実施

大学としては本委員会を中心にこれまでの就職対策を十分に検証するとともに、3学科と密に連携を執りながら各学科の特性に配慮したより実効性のある就職対策を打ち出し、第6期生への就職支援を進めています。

〔第5期生の進路状況 単位：人、％〕

() 内は、前年実績

学 科	卒業者数	進学者等数	就職希望者	就職者〔うち、県内就職者〕	就職率
看護学科	103	3	100	99 [33]	99.0 (96.0)
理学療法学科	19	0	19	19 [11]	100.0 (100.0)
社会福祉学科	44	2	42	39 [20]	92.9 (97.5)
合 計	166	5	161	157 [64]	97.5 (96.9)

看護学科における就職支援

看護学科講師 藤本 真紀子

1. 5期生の状況

看護学科卒業生の就職率は、開学時よりほぼ100%を保っています。しかし、4年次後期は、卒業研究論文の作成、国家試験が控えており、早く就職先を決めたいという思いが強いようで、採用試験の時期が早いことや選択肢が多いことなどから、残念なことに県外への就職が多く、県内定着率が33.3%と低い状況となりました。

2. 学生への支援体制

1) 卒業研究の担当教員による支援

4年生にとってはもっとも身近な関わりを持つ卒業研究担当教員が、個別に希望施設選定、病院訪問、応募手続きなどへの助言や、履歴書の書き方、面接での対応の仕方などを指導しています。指導の際には、学生の希望を第一に、これまでの実習や研究に取り組む姿勢などから、学生の優れた資質を見つけ、よりのばせるよう関わっています。

2) 就職対策支援チーム

学部就職対策委員1名と学科の教員4名で、支援チームを編成しています。看護学科の特性を考え、卒業研究担当教員と連携をとりながら、全体的な指導を進めています。その一つ、進路希望調査では、学生の希望する就職先や進学先を把握し、それぞれの担当教員に伝えるのはもちろんのこと、全体の傾向（県内指向の状況など）から県内定着への意識を高める関わりをしていただけるよう、情報を提供しています。また、これまでも就職活動の進め方などガイダンスを行ってきましたが、今年度からは青森県の就職支援センター講師の協力も得ながら、実践的な就職活動に関する情報の提供や、早い時期から興味を持って就職を考えることができるよう低学年向けガイダンスの工夫など、充実させていきたいと考えています。

理学療法学科における就職支援

理学療法学科准教授 山下 弘二

理学療法学科では、平成19年3月までに1～5期生の101名がすでに卒業し、それぞれが理学療法士として全国各地で活躍しています。施設側の就職の必要最低条件として、理学療法士の国家資格取得がある現在、就職活動に加えて国家試験対策への早い取り組みが重要性を増しています。本格的就職活動は、総合臨床実習終了後の4年次7月以降に始まりますが、養成校の急激な増加による競争の激化により、特に市町村等の地方公務員の場合は、各市町村のホームページ等で確認が必要であり早め（5～6月）の活動を勧めています。

活動手順として、まず、施設見学（アポイントメント後）をしてから、多くの場合は理学療法に関する筆記試験（公務員の場合は一般試験も有）と健康診断、面接試験を受けるという流れになっており、学科としては卒業研究担当教員が、担当学生個別（教員1名につき1～2名の学生を担当）に責任を持って指導に当たっています。その場合、就職活動経過については、学科の就職対策委員（担任と副担任を合わせて3名）を窓口として、学科会議を通して情報交換をした上で、就職対策の方法を議論しています。また、面接試験の受験にあたって、希望する学生については、人間総合科学科目の教員にも協力を頂いて個別指導を受けられる体制を取っています。

5期生までの経験を振り返ると、卒業研究発表が終わる年内には、ほぼ全員が就職先を決め、国家試験に向けての学習に取り組んでいます。国家試験対策としては、自主的学習会の支援と定期的模擬試験（計10回）の実施を行い全員合格に向けての支援を行っています。

最近の国内の理学療法士の就職状況は、養成校の急激な増加（平成19年4月現在総数231校・定員11,774名）に伴って、就職の間口が年々狭まっています。そこで、本学の特色である「地域特性に対応できる人材としての理学療法士」の県内外へのアピールや、既に活躍している卒業生の就職先にも採用して頂けるよう、臨床実習施設としての追加登録を推進しており、今後も学科全体で、就職支援を行っていく予定です。

社会福祉学科における就職支援

社会福祉学科准教授 増山 道康

社会福祉学科5期生、平成18年度卒業生は、就職希望者42名の内、39名が社会福祉施設職員、病院ワーカーや公務員、民間企業社員として就職しました。就職率は、92.9%で昨年の就職率97.5%よりやや低下しましたが、就職者数そのものは昨年と同じでした。しかしながら県内就職率は51.4%で昨年の県内就職率69.2%に比べてかなり低くなっています。なお、公務員関係には警察官2名、公立施設2名が、民間企業等には4名が就職しています。また進学者は2名でした。

県内の社会福祉関係の求人は、卒業予定者数を下回る傾向にあり、県内就職希望者にとっては、厳しい状態となっています。また、社会福祉施設の求人内容は県内外とも介護職が多く、社会福祉士や精神保健福祉士資格や社会福祉の専門性を活用できる職はそれほど多くありません。

これまでも学科内に就職支援委員会を設け、学科教員全員で就職相談、指導にあたってきました。今後は、取り組みをいっそう強化し、希望者全員の就職を目指していきます。具体的には、次の3点に重点を置くことにしています。第1に、ジョブカフェ青森との連携のもとに2年生から就職ガイダンスを行います。ジョブカフェの就労カウンセラーによる個別指導も行っています。既に2月にジョブカウンセラーによる講義を行っていますが、年内に更に2回の講義を予定しています。

第2に、各県社会福祉協議会の福祉の仕事紹介事業をより積極的に利用していきます。県内や近県の就職情報をきめ細かに提供するとともに各県社協が主催する福祉の仕事フェアへ積極的に参加するようにしていきます。

第3に、これまでの対策をより積極的に行います。公務員志望者への自主ゼミ等による受験対策の他、社会福祉以外への就職希望者への支援について、面接やエントリーシート作成の指導等採用に結びつく支援をしていきます。

卒業証書学位記授与式について

教務学生課主査 鹿内 亮一

明け方まで降り積もった雪が足元を濡らし、なお時折雪が舞い降りる平成19年3月14日、学部第五期生の卒業式及び大学院第3回目の修了式が執り行われました。

看護学科103名、理学療法学科19名、社会福祉学科44名に対し卒業証書及び学位記が、大学院博士前期課程修了生20名に対し学位記が、それぞれ新道学長から手渡され、引き続き学部卒業生及び大学院修了生の成績優秀者に対し、学長賞の授与が行われました。

「いのちの大切さを身を持って示し、訴える専門家であり続けることを本学の卒業生、修了生としての誇りの証とし、パイオニアへの道筋にすることを願う」との学長からの式辞に続き、知事から、「大学で学んだ4年間で抱いた志、いのちに対してまっすぐに向かっていくその気持ちを失わずに、歩いて行って欲しい」との言葉が贈られました。他、ご指導、ご支援を頂いた各団体や代表者からもたくさんのお祝いの言葉が寄せられました。

学部を代表し工藤綾華さんから、大学院を代表し久保貴裕さんからそれぞれ送辞が述べられ、これに対し、理学療法学科長浜梯子さん、大学院看護学分野小野彩夏さんから答辞が述べられました。

式典後、管理・図書館棟において、卒業生から贈られたエントランスホール用掛け時計の除幕式が行われ、新道学長からはお礼の言葉が述べられました。

学び舎、恩師との別れを惜しみつつ、舞い降りる雪の中、卒業生は本学を巣立っていきました。



第5期生卒業記念パーティー

卒業関連実行委員（社会福祉学科4年） 梅津 真子

平成19年3月14日、青森国際ホテルにて、第5回卒業記念パーティーが開催されました。例年にない積雪量の少なさではありましたが、当日はまだ肌寒いなか、多くの卒業生や先生方、関係者の皆様がお集まりになりました。先輩方は、学位記授与式の袴姿とは違うドレスやスーツなどで出席され、華やかで盛大な卒業パーティーとなりました。

卒業記念パーティーは毎年卒業関連実行委員会が、4年生を中心に2・3年生が集まり、学生主体で企画・運営されるものです。特に4年生は、卒業研究や就職活動、国家試験など忙しい合間を縫ってホテルとの打ち合わせや、企画などを行ってくださり、このように卒業パーティーが成功したことは感慨深いものだったろうと思われます。

また、私たち在校生としても、先輩方と共に卒業記念パーティーを成功させることができたことを大変嬉しく思います。

パーティー当日には、各学科がこの日のためにパフォーマンスを用意しており、看護学科と理学療法学科はそれぞれ合唱を、社会福祉学科はスライドショーを行いました。先輩方の仲の良さが感じられ、大変、面白く感動的なもので、後輩の私たちもグッとくるものがありました。



また、あちこちで友人同士や先生方と、大学生活を振り返り、笑ったり涙したりする姿も見られ、先輩方の大学生活が楽しく、実り多いものだったことがうかがえました。

4年生にとっては、この卒業パーティーは卒業証書学位記授与式と並ぶ、学生生活の締めくくりとなる最後の行事です。これから、別々の場所で新たな道を歩もうとする先輩方のお姿は、4年間の大学生活を終えた充実感と未来への期待が垣間見られ、私たち後輩にとっては、頼もしいものでした。

大学生活を振り返って



齊藤 真由美

看護学科H19年3月卒業

大学を卒業し、私は現在、八戸市で助産師として働いています。就職して3ヶ月目に入ろうとしてしていますが、日々自分の知識や技術の未熟さを痛感しながら、学習を重ねています。

大学生活を振り返って思うことは、大学生活では本当に自由な時間がたくさんあったということです。大学生活でのサークル活動で得た知識や、アルバイトで得たコミュニケーション技術など社会人になった今、何一つ無駄になっていないと思います。

また大学での実習は本当に大きな学びがあったと思います。実際に、就職してから妊産褥婦さんのお話を聞いたりする時間はとても限られていて、大学時代の実習で妊産褥婦さんとお話したことや、じっくり1人の患者さんについての看護を考えたことなどが、とてもいい経験だったと思います。

大学では大変なこともあるかと思いますが、時間を有意義に使って、やりたいことを一生懸命行って貴重な4年間にしてください。

よく学び、よく遊ぶ



今 美香

理学療法学科H19年3月卒業

大好きな保健大を卒業し、私は現在理学療法士として働いています。患者さんと一緒にリハビリをしながら、学生時代には味わうことのできなかった苦勞と喜びをかみしめながら毎日を過ごしています。

大学生活を振り返ってみると、もっと勉強しておけばよかったと後悔の念でいっぱいになります。技術の問題はさておき、知識は学生時代に蓄えておくに限ります。意味があるのかと疑問に思う講義もありましたが、今になってやっとその意味がわかるようになりました。働いてからももち

ろん勉強することは必要ですが、学生のうちに仲間や先輩、そしてエキスパートである先生を上手に利用して知識を増やして下さい。その知識は卒業後きっとあなたの役に立つでしょう。

また学生だからこそできること、例えばバイトやサークルなどの趣味に打ち込むのもいいでしょうし、飲み会に積極的に参加し、学科や学年の壁を越えてじっくり話し込んでみるのもいいのではないのでしょうか。大学4年間でヒューマンケアを実践できる人間として大きく成長し、得た事柄を武器に保健・医療・福祉分野に還元できるように努力してください。

大学生活を振り返って



種市 寛子

社会福祉学科H18年3月卒業

大学を卒業し、早くも1年が経過しました。仕事に追われる生活の中で、大学で過ごした4年間は私にとってとても大切な時間だったと実感しています。

大学では、新しい環境の中で様々な経験をすることができました。社会福祉に関する専門的な知識を身につけると共に、大学で出会った友人や先生方との関わり、現場実習、卒業研究、ボランティア活動、アルバイトなど多くの事を経験し、成長できたと思います。楽しいことも辛いことも沢山ありましたが、振り返ってみるとそれらはどれもいい思い出であり、現在の生活における心の支えにもなっています。様々な人と関わり、多くのことを感じたり考えたりすることで今までの自分の価値観が変わったり、視野を広げることができました。

4年間という大学生活は、目標を持って様々なことに取り組んでも、何もせずに過ごしたとしても、本当にあっという間に終わってしまうものだと思います。大学でしかできない経験や大学生だからこそ感じられる事は沢山有り、とても貴重なものです。皆さんも限られた時間の中で多くのことを経験し、そこから何かを感じ、大学生活を有意義なものにしてください。

修士論文中間発表について

教務学生専門部会長 藤井 博英

平成18年度修士論文中間発表会が、10月12・13日の両日、教育研究C棟2階N講義室1で、平成18年度博士前期課程修了予定者21名の方々による発表が行なわれた。発表テーマは、ケアに関する研究、健康の維持・増進に関する研究、保健に関する研究などでありました。発表時間は質疑応答を含め1人あたりの持ち時間20分（口頭発表10分、質疑応答9分、交代1分）という短い中で、これまでの研究内容を発表し、質疑応答も活発に行なわれた。質問内容は、発表内容の根拠（裏づけ）や数字や結論の妥当性を打診するもの等々であった。質問に答える院生も自らの考えを素直に述べ、教員や他の院生からのアドバイスや評価を真摯に受け止めており、次へのステップへとつなげていける大きな糧になったと確信している。

中間発表会は、これまで研究を進めてきた修士課程2年生が、テーマや構成について教員をはじめとする他の人々から客観的に評価され、自己の凝り固まった考えや矛盾など自分の小さな世界を見直すことが目的である。特に構成や私見の立て方については、独りで書き進めている中で、極端に視野が狭まり、間違った方向に進んでもなかなか気づかないものである。その軌道修正をおこなえる貴重な機会である。また、社会人の方々は、日々、時間の遣り繰りに四苦八苦していると思います。そのような中だからこそ、研究対象や研究方法、興味関心も違う他分野の方々と、実際に顔を合わせ、互いに刺激し合い、自分の研究を発表するといったことが必要なのだと思う。さらに、修士課程1年生は、自分の研究の構想に役に立ち、計画を立てる際の目安になる。また、すべての参加院生にとって質疑応答の練習の場、効果的なプレゼンテーションはどのようなものかを、体験的に学習する機会である。

本年は、今回の発表で学んだこと、収穫したことを活かし、来年2月の予定されている研究成果の発表会では、効果的で満足いくプレゼンテーション、そして発表成果をあげられることを期待している。残された時間を有効活用し、修士論文完成に向けて追い込みをかけ、最後まで頑張ってもらいたいと思う。また、院生には、自らの研究を発展させ、保健大学の発展に寄与し、更には保健・医療・福祉の発展に寄与する者が誕生してもらいたいことも併せて願う。

大学院新入生のウェルカムパーティー開催

健康科学研究科 地域保健福祉学分野地域高齢者保健学領域 博士前期課程2年 桜木 康広

去る4月5日（水）に入学が許可された新入生26名（博士前期課程16名、博士後期課程10名）のうち、22名の新入生にご参加いただき、在学生22名（博士前期課程12名、博士後期課程10名）と教職員26名によるウェルカムパーティーが総勢70名を集めて、4月9日（月）のお昼に開催されました。

在校生のうち博士前期課程2年の沼田祐子さんと木村菜由さんが中心となって、前日の日曜日午後から大学院棟であるC棟1階のコミュニティホールの飾り付け（先輩から引き継いだ品々）やテーブルセッティングを行い、準備万端にして当日を迎えたのでした。

パーティーは、リボウィッツ志村よし子学長のご挨拶と川村佐和子研究科長の乾杯のご発声で、小粋なお弁当と飲み物とお菓子を囲みながら、和やかな雰囲気が進められました。テーブルごとに飾られた、違う種類の一輪差しが、和やかな雰囲気を一層盛り上げていたことは、言うまでもありませんでした。

各領域ごとに分かれたテーブルで、同じ研究分野の仲間として語り合いました。宴も酣（たけなわ）のなか、出席学生の自己紹介、領域ごとの研究テーマおよび教員の紹介が行われ、事務局からも小山石事務局長、神保事務局次長、前田泰三教務学生課長、大学院教務担当の鹿内主査にもご参加頂き、研究者の卵としての院生生活に夢や期待を膨らますことが出来ました。

本学の大学院生は社会人が多くを占め、県内外を問わず、遠方からも通う学生が居ることから、情報交換をする良いきっかけになったように思います。

前期課程である修士の学位を取得した卒業生は、まだ3期生までと、大学院の歴史としては短いですが、青森県立保健大学の教育理念であるヒューマンケアの追究が、今後も脈々と引き継がれていけることが再認識できたパーティーでありました。

2006年度青森県保健医療福祉研究発表会について

青森県保健医療福祉研究発表会準備委員長 健康科学研究センター長 松江 一



青森県保健医療福祉研究発表会は、これまで青森県立保健大学学術研究集会という名称で3回開催されてきましたが、名称と開催時期から参加しづらい等の声があり、今年度から名称と開催日を変更しました。委員会では、比較的早い時期から2006年度のメインテーマを「制度改革をめぐって～保健・医療・福祉の場合～」とし、本会が、県内の保健・医療・福祉の専門家等の研究発表や意見交換の場としたいこと、また、本会を本県の保健・医療・福祉に関わる人たちのネットワーク構築の場として活用して欲しいことを願いながら多くの参加を募りました。

その結果、締め切りの12月1日には口述発表34題、ポスター発表20題計54題の演題申し込みを頂き、また、学内76名に学外117名の計193名の参加のもと、発表会でも終日活潑な意見交換が行われ、会を主催した準備委員会としてはホッと胸をなでているところです。また、このことに関しては、新道前学長はじめ、本学企画情報課、研究開発科委員会の皆様、及び県健康福祉部主管課が一体となって、早くから関係機関に周知して頂いたこと、心から御礼申し上げます。

大会当日午後からの研究発表会に先立ち、午前中は本学川村佐和子研究科長の司会進行で3人のシンポジストを迎え、「転換期にある保健・医療・福祉の現状と課題」というシンポジウムが行われ、本学社会福祉学科の増山道康先生が「障害者自立支援法がもたらした現状と課題」、理学療法学科の渡部一郎先生が「医療制度改革がもたらした現状と課題」、保健生活協同組合訪問看護ステーション虹の寺地栄所長が「利用者を支える立場から」というタイトルで講演され、これに青森県健康福祉部の3名の方にコメントを頂くなどして、講師

と200名近くの出席者により熱気あふれる討論がなされ、今後の青森県の保健・医療・福祉の方向性や、「私たちに求められているものは何か」について深く考えさせられた2時間でありました。

午後からは3会場に分かれて口述発表が行われ、第一会場では保健現場からの研究報告、検診、看護実習、保健の実態調査や県内各地区での取り組み、第二会場では生活習慣病のリスク解析、タバコの売り上げと標準化死亡比、食中毒発生や食中毒菌、抗酸化食品、ノロウイルス、第三会場では地域連携リハ、地域連携ボランティア組織、子供相談、自殺、自閉症、精神的ケアに関する話題が発表されました。

会場前の廊下では24題のポスター発表が昼休みの約45分間を利用して、展示、質疑応答がなされ、目の動きと絵の認識、リュウマチ患者のADL、中国でのクリティカルパスの導入、温熱療法と交感神経、地域リハ、筋トレ、学生の食習慣、脳卒中リスクと食事因子、健康教室と食習慣変容、断酒指導、多職種連携、救急看護、在宅療養と地域リハ、新卒看護教育プログラム、糖尿病患者、リグノフェノールの抗高血圧など多方面に渡る話題が発表されました。

今回の発表会を振り返って、青森県保健医療福祉研究発表会が、これから将来に渡って時代を反映した研究、調査、発表及び討論を通して、「地域や国の発展」、「青森県民や日本国民の物心両面にかかわる質の高い社会生活の向上」や「そのような社会の構築に寄与できるシステムの構築と人材育成の場」となればと願っています。最後に本研究会に参加された人々の和が広がり、新たなネットワークや交流が生まれること期待をしています。

平成19年5月



県内外で進学相談会開催

例年行われている進学相談会。これは、本学の教員が会場に出向き、教育内容や就職実績、学校生活などを受験生などに直接伝える貴重な機会になっています。

今年も八戸市（5 / 16）、盛岡市（5 / 17）、仙台市（5 / 21）、秋田市（5 / 23）、山形市（5 / 25）、弘前市（6 / 6）、青森市（6 / 7）、函館市（6 / 14）と、県内外8ヶ所で実施しました。

中には閑散として暇を持て余してしまった会場もありましたが、全体では昨年より多くの方に相談に訪れていただきました。(-_-)パチパチ。

受験を予定されている生徒、高校教諭、保護者の方が、とても熱心に質問されたので、本学の教員もついつい熱が入り、長蛇の列ができることも・・・。

今年は特に、来年4月開設予定の栄養学科の関心が高かったようで、多くの方が栄養学科のブースを訪れていました。

進学相談会に来られた受験生の皆さん、是非受験して下さい。待ってます。そして、来年の春、我が大学でまた会えたらいいですね。



オープンキャンパス開催



6月24日（日）、本学でオープンキャンパスを開催しました。これは、受験を予定されている方をはじめとして、たくさんの方が本学を直接ご覧になって理解してもらうことを目的としています。

今年も高校生、保護者など多くの方に参加していただき、午前中は学科ごとにカリキュラム等の説明や模擬講義を、午後は見学・体験・実習・相談コーナーを準備して見学して頂きました。また、サークル活動の紹介もしました。

来校して頂いた方は、本学の独特の設備や生き生きとした本学の学生をみて、驚かれたのではないのでしょうか。

とにもかくにも、今年も無事に終了することができました。準備にご尽力頂いた教員の皆様方、お疲れさまでした。また当日ご協力頂いた学生の皆様、ありがとうございました。

受験生の方にも、本学を受験するしないに関わらず、進路の参考となってもらえたならば、とても幸いです。

[大学院・学部編入学] 平成20年度入学者選抜試験のお知らせ

青森県立保健大学では、大学院及び学部編入学の平成20年度入学者を募集しています。詳しくは、大学院及び編入学の「募集要項」をご覧ください。

連絡先／教務学生課入試担当 TEL 017-765-2144 FAX 017-765-2188 E-mail nyushi@auhw.ac.jp

大学院(健康科学研究科博士前期課程・後期課程)

募集人員	健康科学専攻 博士前期課程…………… 20名 博士後期課程…………… 4名
出願期間	平成19年8月20日(月)～平成19年8月24日(金)
選抜試験	平成19年9月15日(土)
合格発表	平成19年9月26日(水)

学部編入学(健康科学部)

募集人員	看護学科…………… 10名(3年次編入) 理学療法学科…………… 2名(3年次編入) 社会福祉学科…………… 4名(2年次編入)
出願期間	平成19年7月30日(月)～平成19年8月3日(金)
選抜試験	平成19年9月1日(土)
合格発表	平成19年9月7日(金)

人事異動

＜新任・転入等＞



看護学科教授

深谷 智恵子

(フカヤ チエコ)

3月まで東京慈恵会医科大学に勤務していました。日本で最初に看護教育を始めたという歴史に押しつぶされそうなることから、近代的な雰囲気のあるキャンパスにきて、新鮮な気持ちで仕事をしております。私の専門は重篤状態にある患者の看護、つまりはクリティカルケア看護学です。どうぞよろしくお願ひ致します。



健康科学教育センター助手

奈良岡 恵子

(ナラオカ ケイコ)

「気は使うものではなく、気は利かせるもの」という恩師である大学院の指導教官の言葉を思い出すこの頃。早く仕事に慣れ、周囲に気を利かせる余裕が持てるよう努めたいと思っています。どうぞ宜しくお願いします。



社会福祉学科講師

石田 賢哉

(イシダ ケンヤ)

当事者との共同研究というスタイルで社会福祉研究をしています。専門は精神保健福祉です。量的調査やグループワークの勉強をしています。学生の皆さんとこれからの社会福祉を真剣に、そして希望とユーモアをもって考えていきたいです。どうかよろしくお願ひします。



企画情報課課長

山村 義彦

(ヤマムラ ヨシヒコ)

大学の事務局は何と忙しく、仕事をしながら次の仕事のことを考えています。体が続きますか…頑張ります。



人間総合科学科目助教

メリッサ 小笠原

(メリッサ オガサワラ)

オーストラリアの Queensland University of Technology 英語・日本語教育学科卒。7ヶ月前に青森県に来ました。生活にも少しなれてきて、今は和太鼓と Hot Yoga で自由な時間を楽しんでいます。AUHW の生徒さんたちが笑顔で授業に参加してくれるので、愉快的環境で教えることが出来てうれしいです。これから仕事を頑張っていきたいと思ひますので宜しくお願いします。



教務学生課課長

前田 泰三

(マエタ タイゾウ)

目の前には、きれいに裾を開いた八甲田山。ポプラ並木の緑、薫るキャンパス。青森県立保健大学は素晴らしい学舎です。



人間総合科学科目助手

熊谷 貴子

(クマガイ タカコ)

皆さんこんにちは。出身は八戸市ですが、青森市に住んで4年経ちました。青森県立保健大学での環境は、津軽弁同様、日々勉強です。

学生さんの気持ちを理解し、また初心を忘れず、微力ながらも何かに貢献できるよう仕事に励みたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。



総務課主査

間山 秀幸

(マヤマ ヒデユキ)

4月、大学内のことを何も知らずに、A棟・B棟・C棟と案内図を見ながら研究室を探したり、異動早々に祖母が亡くなったこともあり、公私ともに多忙な毎日でした。ようやく2ヶ月が過ぎ、少しでもスピーディーに仕事をこなせるようがんばりたいと思ひます。



看護学科助手

伊藤 治幸

(イトウ ハルヒコ)

北海道から、縁あって青森に来ました。これまでの臨床経験を生かしながら教育を行っていただきたいと思います。できるだけ早く環境に慣れ、仕事をこなせるように頑張りたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひします。



企画情報課主査

岡村 慶子

(オカムラ ケイコ)

環境政策課から異動してきました。学内で働いていると、電気のつけっぱなし、裏面が使える紙が丸めて捨てられているなど、「もったいないなあ」と感じるがよくあります。皆さんに煙たがられない程度に、環境にやさしく、節約にもなる取組の輪を広げていきたいと思ひます。



看護学科助手

山本 真樹子

(ヤマモト マキコ)

奈良から青森に来て、改めて自然の素晴らしさを感じています。助産師として多くの生命の誕生に立ち会い、命の素晴らしさを感じてきました。学生の皆さんが生きていること、生命の素晴らしさを感じて、受け取っていくお手伝いができれば嬉しいです。宜しくお願いいたします。

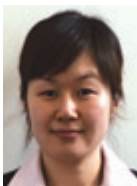


教務学生課主査

長内 俊幸

(オサナイ トシユキ)

最近何かといい感じで過ごしています。



看護学科助手

内城 絵美

(ナイジヨウ エミ)

4年前にこの大学を卒業し、県内での臨床経験を経て再び戻って参りました。小児看護領域が担当です。自分の大学時代を思い出しながら、学生の皆さんと一緒に学び、自分自身も成長していけたらと思ひますので、よろしくお願ひいたします。



総務課主事

野呂 香織

(ノロ カオリ)

出納局、総務部、環境生活部、健康福祉部と、いろいろな業務に携わってきました。これから独立行政法人化へ向けて、いろいろな事が待ち受けていると思ひますが、乗り越えて頑張っていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

＜転出・退職等＞

中南地域県民局地域健康福祉部子ども相談第一課長 笹 常春（事務局教務学生課長から）	（退職）新道 幸恵（学長・看護学科教授）
下北地域県民局地域健康福祉部主幹 深堀 満（事務局主幹から）	（ " ） 小山 敦代（看護学科教授）
青森県立美術館主査 小田川聡子（事務局主査から）	（ " ） 益田 早苗（看護学科助教授）
東青地域県民局地域健康福祉部主査 成田智佳子（事務局主査から）	（ " ） 原田 光子（看護学科助教授）
	（ " ） 吉川由希子（看護学科講師）
	（ " ） 村松 仁（看護学科講師）
	（ " ） 鈴木 保巳（社会福祉学科講師）
	（ " ） ケリー デニス（人間総合科学科目講師）
	（ " ） 工藤奈織美（看護学科助手）
	（ " ） 高橋司寿子（看護学科助手）
	（ " ） 田中 志子（社会福祉学科助手）

＜昇任等＞

助手から講師へ 看護学科講師 福井 幸子	助手から助教へ 看護学科助教 井澤美樹子	看護学科助教 田中 広美	理学療法学科助教 小田桐 愛	研究センター助教 駒田 亜衣	人間総合科学科目講師へ カバナ バリー
看護学科講師 千葉 敦子	看護学科助教 早川ひと美	看護学科助教 三津谷 恵	社会福祉学科助教 加賀谷真紀		人間総合科学科目助教へ リボウィッツ ロバート
看護学科講師 佐藤 愛	看護学科助教 清水 健史	看護学科助教 本間ともみ	社会福祉学科助教 長谷川真理子		主査から主幹へ 事務局主幹 千田 昭裕
看護学科講師 赤羽衣里子	看護学科助教 三浦 博美	看護学科助教 行方かおり	人間総合科学科目助教 井澤 弘美		
教育センター講師 川内 規絵	看護学科助教 佐藤真由美	理学療法学科助教 橋本 淳一	人間総合科学科目助教 廣森 直子		

編 集 後 記

《活彩！保健大学だより16号》をお届けいたします。

青森県立保健大学は本年度9年目を迎え、学部4年、博士前期課程2年、博士後期課程3年全ての学年がそろい、大学も活気に満ちあふれています。

本号の冒頭にリボウィッツ志村よし子新学長の学長就任挨拶を掲載しました。

本学に求められる役割は、今後ますます重要なものとなっていきます。

本学をよりよく知っていただくため、広報媒体として魅力ある紙面づくりに取り組んで参ります。

最後に、お忙しい中、原稿執筆に協力いただいた方々には本当に感謝申し上げます。

今後とも、よろしくご指導、ご協力、ご支援のほどお願い申し上げます。

（広報記録委員長 大和田猛）

◎広報記録委員会名簿

大和田猛、羽入辰郎、岩月宏泰、佐藤愛、細川満子、加賀谷真紀、長谷川真理子、長門五城、坂本芳人、山村義彦、前田泰三

◎広報記録委員会事務局

間山秀幸



青森県立保健大学

〒030-8505 青森市浜館字間瀬58-1 TEL017-765-2000

編集・発行／青森県立保健大学広報記録委員会

大学ホームページ <http://www.auhw.ac.jp/>
(バックナンバーもご覧になれます。)